

～大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業に伴う～

# 高月遺跡

第1次発掘調査概要報告書

1990.3

大和郡市教育委員会

大和郡市都市整備部  
大和小泉駅前区画整理工事事務所

## 例　　言

1. 本書は、大和郡山市小泉町、小林町で実施した「高月遺跡」第1次調査の概要報告書である。
2. 調査は、大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業を契機として実施した。今回のものは平成元年度事業における公共用地部分の調査である。
3. 調査期間は平成2年1月12日～同年3月15日である。調査面積（トレンチ面積）の集計は約2,000m<sup>2</sup>である。
4. 調査に際し、下記の方々の御参加を得ました。記して感謝いたします（順不同）。  
　　『作業員』 岸田勝信、堀川正治、米田利男、杉山典三、市井義治、崎山庄勝、谷淵喜一、村田順弘  
　　『補助員』 御宮司和史（関西学院大）、下大迫幹洋（奈良大）
5. 調査は、現地調査を大和郡市教育委員会（教育長 井上三夫）、事務一般を大和小泉駅前区画整理工事事務所（所長 新澤 熊）がそれぞれ担当した。直接の調査担当は社会教育課の山川均である。
6. 本概報で使用した造構平面図（図5）は、㈱バスコ社作成のものによる。
7. 本概報に関しては、下記の分担によって作成した。  
　　『製図・トレース』 藤岡英礼（高野山大学）、竹内直子（京都女子大）、濱口芳郎（大和郡市教育委）、山川、下大迫  
　　『執筆、編集』 山川、藤岡
8. 調査に際しては、地元小泉町、小林町の方々より多くの御援助、御配慮をいただきました。

## 本文目次

I 調査の契機および経過.....	1
II 調査地の位置および環境	
1. 地理的環境.....	1
2. 歴史的環境.....	3
III 調査の概要.....	6
IV まとめ.....	7

## 図目次

図1 大和郡山市の位置 (1/250,000).....	2
図2 トレンチ配置図 (1/2,500).....	折り込み
図3 大和郡山市の地形分類図.....	3
図4 高月遺跡と周辺の遺跡.....	4
図5 造構平面図 (1/100).....	折り込み
図6 SB-01 実測図 (1/40) .....	8
図7 調査地周辺の復元条里及び北の横大路推定地.....	折り込み

## 図版目次

図版1-1 第6トレンチ全景	
2 同上(部分)	
図版2-1 堀立柱建物群検出状況(南より)	
2 SB-01検出状況(北より)	

## I 調査の契機および経過

今回の調査は、大和郡山市が実施している大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業（以下「事業」と略する）に伴うものである。もとより、事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地には該当しないが、事業が19.5haときわめて広域に及ぶため、文化財担当課の市社会教育課と事業担当課である小泉駅前区画整理工事事務所が事前協議を重ね、開発事業に先行して地下遺構の有無確認のための試掘調査を実施することとした。試掘調査は平成元年度事業の公共用地予定地（道路および公園）を対象として進めた（図2）。その結果、図2で第6トレンチとした部分より堀立柱建物群の一部とみられる遺構を確認したので、当該トレンチにおいて各遺構の精査を実施すると共に、航空写真、同測量等の記録保存措置を構じた。なお、他のトレンチではそれぞれに顕著な遺構の存在は認められなかった。トレンチ面積の総計は約2,000m<sup>2</sup>である。

調査は平成2年1月13日に開始し、同年3月15日に終了した。調査期間の大半は第6トレンチの精査に費したものである。

なお、第6トレンチでは遺構の密な地区において、公共用地以外の部分（換地部分）の拡張調査を実施することとした。それについては次年度に報告する。また、平成2年度事業分の調査については、今年度と同様、公共用地にトレンチを入れ、地下遺構の有無確認を行う。

## II 調査地の位置および環境

### 1. 地理的環境（図3）

大和郡山市は、地形のうえで、市域の中央やや東よりを貫流する佐保川によって、東西におおまかに分けることができる。佐保川の東側は、天理市域の丘陵を開拓する諸河川（地蔵院川、菩提仙川、高瀬川等）が形成する緩傾斜の扇状地が広がっており、それが佐保川の氾濫原に接する。対して西側は、かつての富雄川が形成した緩傾斜の扇状地が広がっている。現在の富雄川は南北方向に貫流しているが、それは近世の治水事業に伴う、堤防による川筋固定の結果であり、本来の富雄川は扇状地上を鳥趾状に網流していた。現在の富雄川は扇状地の扇側部を流下し、大和川に合流して①いるのである。

今回の調査地は、この富雄川緩傾斜扇状地上に立地する。調査対象地（事業予定地内）においても何条かの旧流路が認められるが、それは、試掘によつても確認された（図2）。すなわち、流路の表層は中～粗砂より成り、現在でも地下水位の高い半湿田の状況を呈する。対して遺構を検出した部分は微高地状を呈し、表層はシルト～細砂より成る。こちらは畑として蔬菜類が栽培されているケースが多い。むろん高燥であつて居住に適しているといえる。

この富雄川緩傾斜扇状地の西側には矢田丘陵より派出した中～低位の段丘群がある。それは、よ

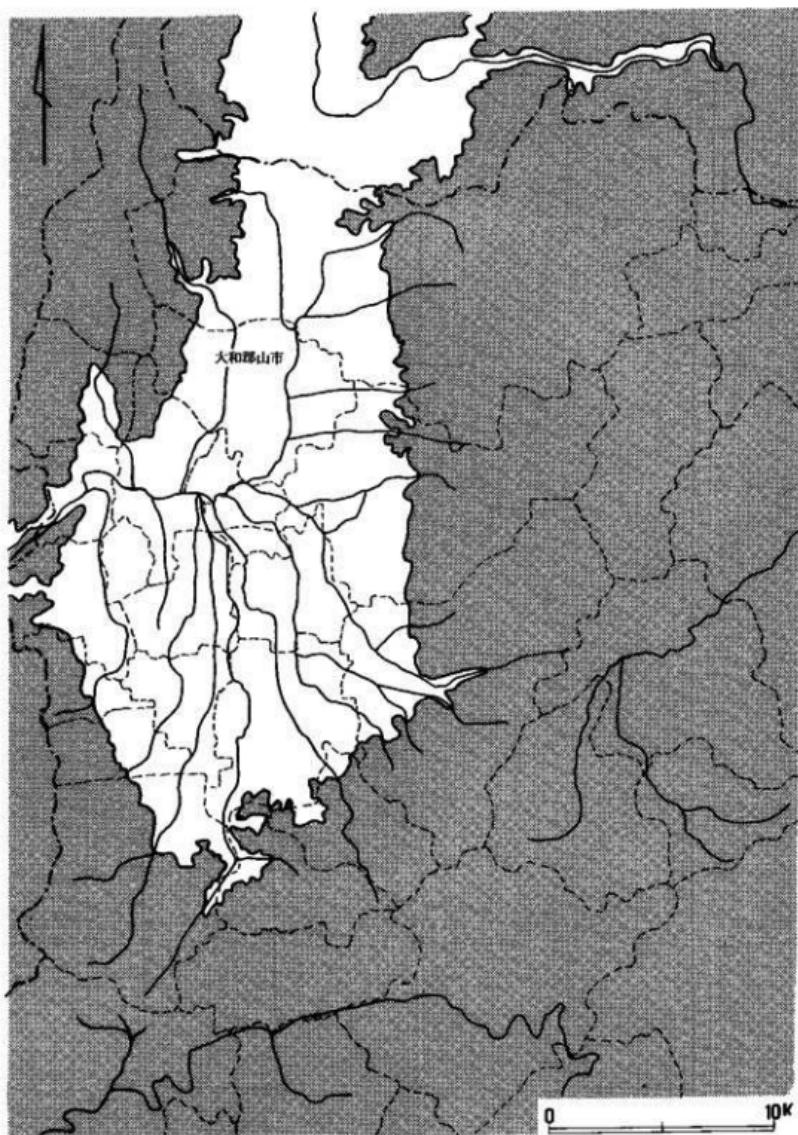


図1 大和郡山市の位置 (S : 1/250,000)

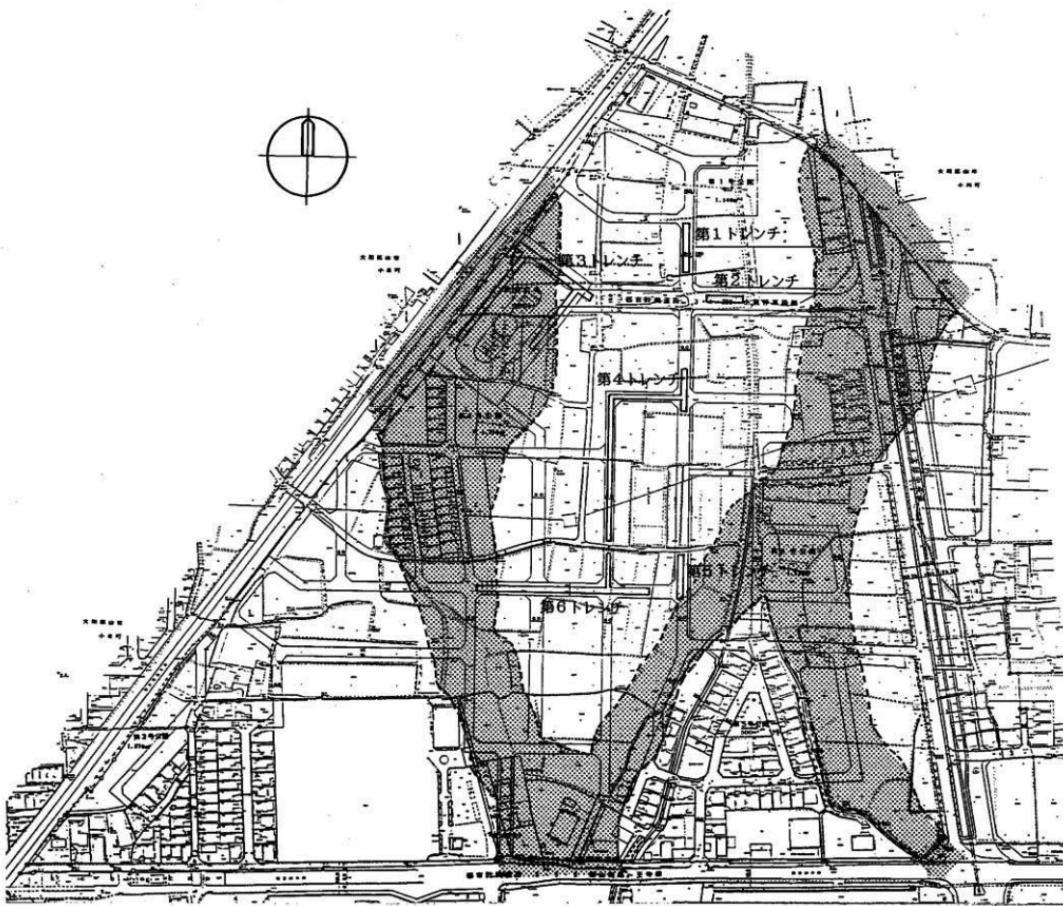


図2 トレンチ配置図 (1/2,500) トーン部分は川河川

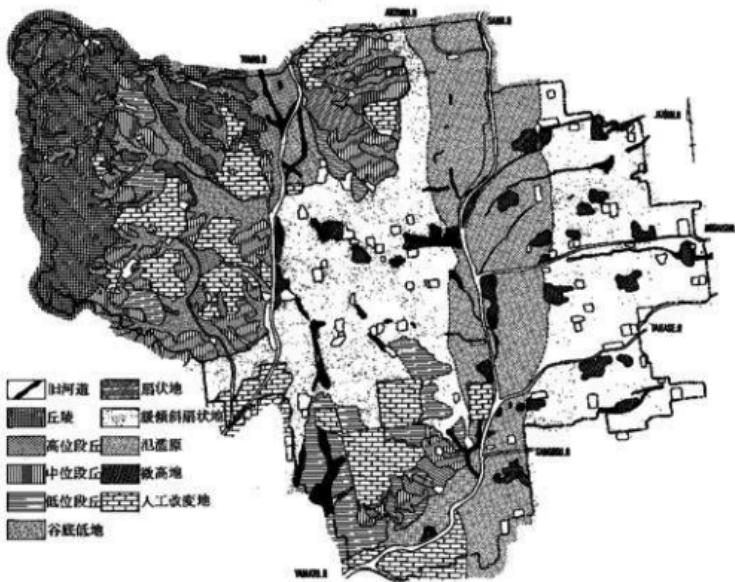


図3 大和郡山市の地形分類図

り北側では侵食が進んで平坦面をもたぬ幅の狭い低丘陵群となっている。いずれも大阪層群より成る。

また、調査地の南方には水平な大阪層群より成る、台地性の頂面が平坦な額田部丘陵がある。

## 2. 歴史的環境（図4）

本項においては、富雄川緩傾斜扇状地内、およびその周辺の丘陵上の遺跡について概観する（以下、「本地域」と略する）。

本地域においては、かつて慈光院裏山遺跡（2）よりサヌカイト製の有舌尖頭器が1点出土している。現在までのところ本地域では最古の遺物であるが、本例は残念ながら弥生時代の遺構より検出されたものであり、該期における他地域からの搬入、2次的な使用の可能性も払拭できない。ただし、上部洪積層から成るこれらの段丘上に旧石器時代終末期に人類が居住していても何ら不自然ではない。遺構の発見も含め、今後の調査に期待がもたれる。

さて、確実に本地域において人類が居住したことを示す遺跡は古屋敷（3）～満願寺遺跡（4）である（両者の境界は判然としない）。この遺跡は縄文時代後期（縁帶文系縄紋土器群）から開始



図4 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	高月遺跡	飛鳥	15	笠尾古墳	~(=)	29	遺物散布地	中世
2	慈光院	奈良~	16	筒井城	室町	30	~	奈良
3	古屋敷遺跡	飛鳥~近世	17	小泉城	中世~近世	31	~	奈良
4	満願寺遺跡	古墳	18	番条城	中世~	32	~	古墳
5	西田中遺跡	弥生(中)	19	新木山古墳	古墳(後)	33	~	奈良~室町
6	菩提山遺跡	弥生~古墳	20	稗田環濠聚落	中世~	34	~	~
7	法起寺南遺跡	古墳(前)	21	稗田・若櫻遺跡	弥生~中世	35	西田中瓦窯	奈良
8	本庄・杉町遺跡	奈良~平安	22	下ノ道	飛鳥~平安	36	遺物散布地	古墳~礎倉
9	遺物散布地	古墳	23	北の横大路	~	37	古墳	古墳
10	小泉大塚古墳	~(前)	24	外川遺跡	弥生(後)	38	遺物散布地	古墳
11	六道山古墳	~(=)	25	遺物散布地	奈良	39	慈光院裏山遺跡	弥生
12	小泉孤塚古墳	~(後)	26	~	古墳	40	小泉遺跡 (大塚山遺跡)	弥生(後)
13	小泉東孤塚古墳	~(後)	27	~	奈良			
14	割谷古墳	~(=)	28	南鬼塚遺跡	古墳~中世			

するもので、晩期終文の凸帯文土器も出土している。このあたりになると水稻耕作の雰囲気が漂うが、この遺跡は継続性が強く、古墳時代中期ごろまでは確実に存続する。本地域においては他にこのような遺跡は知られていないので、ここではこれを拠点集落として捉えたい。

つぎに、弥生時代中期に至ると、満願寺～古屋敷遺跡が既述の通り継続するほか、西隣する段丘上において多くの集落が営まれるようになる。西田中遺跡（5）や慈光院裏山遺跡（2）、菩提山遺跡（6）などがその代表である。これらの集落は、段丘上の平坦面を居住域として活用し、段丘を開析する小さな谷地部分を生産域（水田）として利用したものと思われる。こうした谷部分は崖端湧水による自然灌漑が得られるので、当時の生産技術に適したものであろう。

これら段丘上の集落はその後、弥生時代後期～古墳時代前期まで存続するものが多い。しかし、古墳時代前期後半を境として、これらの集落は廃絶する。おそらく、鉄製農具の普及に基く開発技術の急速な発展が、低地部分における人工灌漑を可能としたため、段丘上の集落に付随する谷水田が生産域としての魅力を失ったことが、そうした廃絶の背景だろう。

そうしたわけで、古屋敷～満願寺遺跡は生産域として、後背湿地などの自然灌漑水田（湿田）から人工灌漑水田（乾田）への転換がなされたので、集落規模自体はより一層拡大する。また、法起寺南遺跡（7）は古墳時代前期後半より登場する遺跡である。これも、背景には人工灌漑技術の急速な普及があるだろう。同様に、本庄・杉町遺跡（8）でも居住はじまる。この時期には、扇状地内の多くの地点で集落が営まれはじめたものと考えられる。そうした推定を裏付けるように下ン田遺跡（9）では該期の溝（灌漑用と思われる）が検出された。

古墳時代後期については、古屋敷～満願寺遺跡が存続するほかは、今までのところ発掘調査によって確認された遺跡はない。

なお、弥生時代中期～古墳時代前期にかけて集落が営まれた段丘上では、集落の廃絶後、それと重複するように多くの古墳が築造されるようになる。これは、居住域（生産域）としての魅力を失った、こうした地形区が、低地にある集落の奥津城（墓域）として変貌してゆくさまをよくあらわしているといえよう。それら古墳のうち、代表的なものには小泉大塚古墳（10）、六道山古墳（11）、小泉狐塚古墳（12）、小泉東狐塚古墳（13）、割塚古墳（14）、笛尾古墳（15）がある。これらは、割塚古墳を除くと、各時期の古墳がほぼ隣接して認められることから、本地域の各時期ごとにおける盟主墓と考えてよいと思われる。この他に、小規模な古墳は慈光院裏山遺跡（2）や菩提山遺跡（6）などで、墳丘を削平された古墳の、周濠のみが検出されている。

ところで、続く飛鳥～奈良時代にかけては、本地域においては従前は遺跡の「空白時代」であった。つまり、発掘調査によって遺構が確認されたのは、本庄・杉町遺跡（8）における奈良時代の井戸1例が知られるのみという寂しい情況にあった。しかしながら、本書に報告するように、今回新たに高月遺跡（1）において7世紀代の建物群の存在を確認することができた。なお、高月遺跡の南方には、竜田道に通じる「北の横大路」が存在した、ともいわれている（第IV章参照）。この

「北の横大路」は、西へ向かえば竜田道となって河内に至り、東では、現在の佐保川の東側で下ツ道に合流する。この下ツ道を北上すれば御存知の平城京に至り、南へ下れば横大路に合流し、藤原京へと至る。さらに、「北の横大路」を東に延長するならば、それは都祁、山添を経て伊賀に至ったものと思われる。

ところで、この「北の横大路」はその後、中～近世、いや、見方を変えれば現在に至るまで国道25号線として利用されている。このルートは先記したように交通上重要なルートであるが、この道に面するように、15世紀中頃には筒井城（16）が築造される。

筒井城は、興福寺大乗院方官符衆徒であった筒井順慶が後に郡山城に移封されるまでの撫城である。筒井城は、すぐ南方に畠田部丘陵があり、城郭立地としては、むしろこちらが適する。たとえば、後の郡山城は自然地形（段丘）に大規模な人工改変を加えて築城している。筒井城が、あえて低地を選んだのは、かの「北の横大路」つまり交通の要所としての地を意識したものかもしれない。

なお、他の中世城郭としては小泉城（17）がある。こちらのほうは自然地形を巧みに生かした城郭構造をとる。小泉城は、興福寺大乗院方衆徒小泉氏の撫城である。近世には片桐氏1万5千石の撫城として栄えた。

また、調査地からはやや離れるが、端田遺跡（市内矢田町）では近年の発掘調査によって、興福寺大乗院方衆徒矢田氏の撫城と思われる遺構が発見された。<sup>⑨</sup>自然丘陵に大規模な人工改変を加え、外敵の侵攻に備えていたようだ。

番条城（19）もまた、興福寺大乗院方衆徒番条氏の撫城である。佐保川および菩提仙川の形成した微高地上を占地する。南北に長い形態を呈するが、厳密にいうとそれは3つの郭から成ることが知られている。

なお、現在みられる村々もまた、中世末～近世初頭にかけて形成されたものが多いと思われるが、これらの村落は旧富雄川が形成した微高地上に営まれている。また、本地域内に点在する溜池は、旧河道を利用している場合が多い。

### III 調査の概要

#### 1. 調査方法

調査方法としては、まず平成元年度事業予定地区における公共用地（道路および公園等）において幅3～4mのトレンチを配し、地下遺構の有無確認に努めた（図2）。これらのトレンチのうち、耕作関係の溝（近世～現代）を除き、顯著な遺構が確認されたのは第6トレンチである。第6トレンチは幅4m、東西延長110mの東西トレンチを主体とし、それに幅3m、南北長25mのトレンチが付く。面積は約470m<sup>2</sup>である。

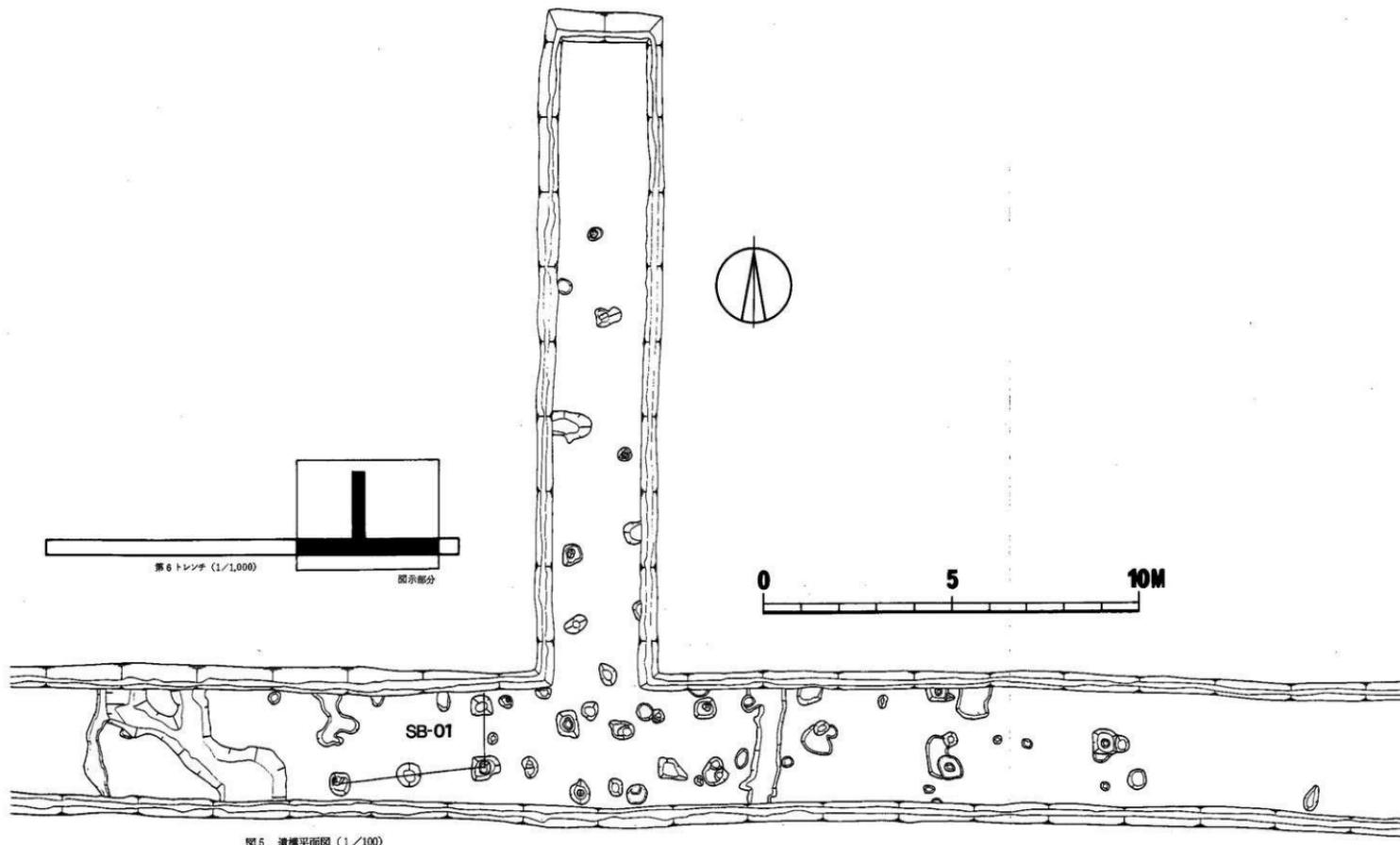


図5 道構平面図 (1/100)

## 2. 検出遺構等について（図5）

現在の耕土（約20cm）、および床土（約10cm）を除去すると褐色のシルト～細砂層（約10cm）に至る。これを除くと明茶～淡褐色のシルト～中砂層があらわれる。これが今回の遺構検出面である。氾濫性の堆積物より成っている。

検出された遺構には7世紀代を中心とする掘立柱建物群、中世～近世に至る耕作関係の溝、および小ピットである。

このうち、7世紀の柱穴は、トレントの東側において集中していた。堀方の規模は通常で一辺が40～60cmである。これらのうち、柱列としてならぶものは何例か指摘し得るが、今回の調査範囲は狭く、また後日周辺の拡張調査を控えているので、ここでは1例（SB-01）について述べる。

SB-01（図6） 本例は、東西2間、南北2間以上の掘立柱建物である。なお、建物の西側は自然流路が存在するために確認できなかった。柱堀方はおよそ50cm×50cmの正方形で、柱痕等の遺存はなかった。柱穴は円形で直径は約25cmである。深さは検出面より40cm程度を測るものが多い。柱間は東西列が約2m、南北列は約1.6mである。

建物の方向は、南北の柱列を基準として、国土座標軸方眼方位に対し約6°西偏している。なお、この値は他の柱列にもあてはまる。このことは、これらの建物群が、ある一定の基準に基き計画的に建てられていたことを示す。

SB-01の時期については、堀方のひとつより出土した須恵器（杯蓋）片より考えて、7世紀（前半？）である。ただし、小破片なので正確な時期は確定し得ない。なお、堀方内からは須恵器のほかに土師器の小片も出土したが、いずれも時期を特定できる資料ではない。

耕作関連の遺構 トレントを横断する南北方向の溝は、いずれも耕作関係の遺構である。このうち、SD-01は13世紀、他のものは全て近世以降のものである。出土遺物にはSD-01より瓦器片および土師器片、他のものからは土師器片、瓦質土器片、陶磁器片が出土したが、量的にはいずれもごく僅かである。

## IVまとめ

今回の調査における最大の成果は、7世紀のものと思われる掘立柱建物群の存在を確認したことである。それらの南北軸は、いずれも国土座標方眼方位（真北）に対し約6°西偏しているものの、何らかの方法によって、東西、南北を指向していることは間違いない（ちなみに、現在の磁北は方眼方位に対し6°30'西偏している）。

もとより、今回の調査では建物群のごく一部を検出したにすぎず、建物個々の規模、相互の配置、正確な時期などは不明である。むろん、その性格等も現時点では明らかにすることはできないが、以下において、2、3の重要な点を指摘しておきたい。

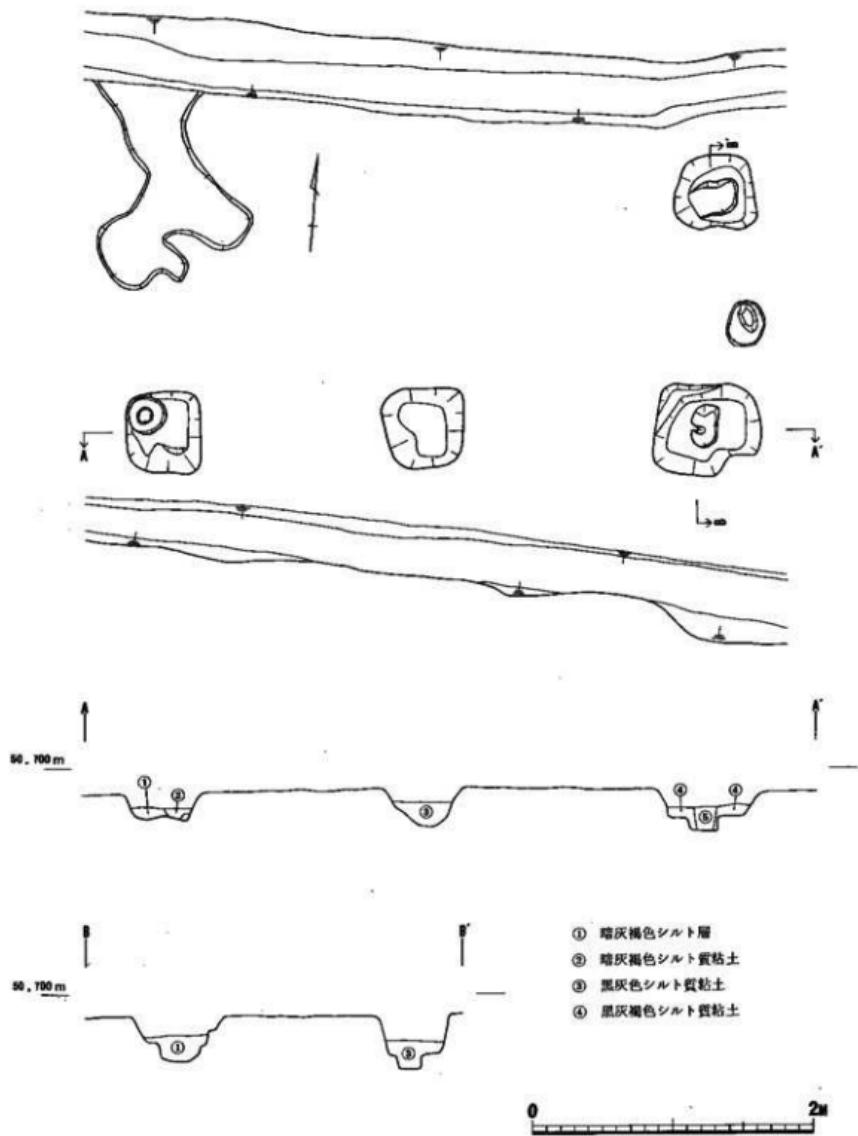


図6 SB-01実測図 (1/40)

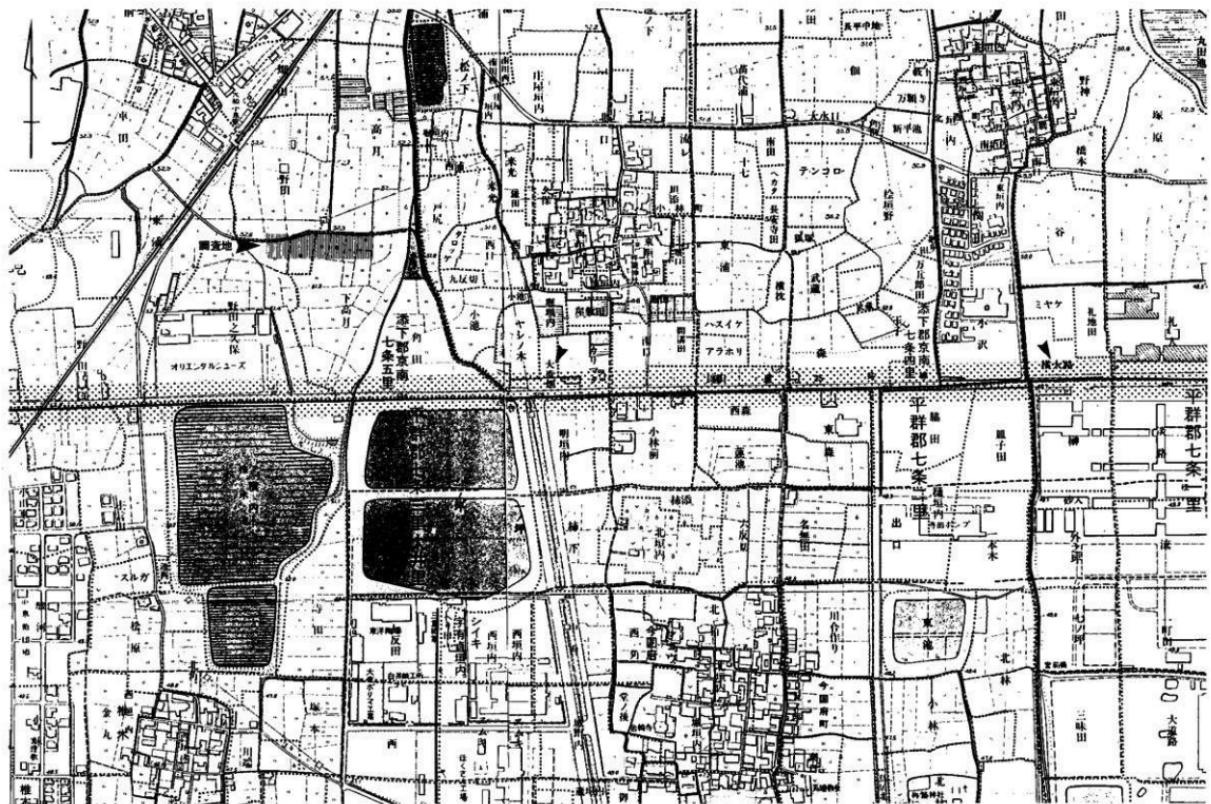


図7 調査地周辺の復元条里及び北の横大路推定地（トーン部分）『大和國条里復元図』より作成

ひとつは、今回遺構が検出された地点から200m足らずには「北の横大路」推定ラインが通ることである。図7は『大和国条里復元図』の複写であるが、それによれば調査地の南東に「大道畠（傍の意？）」や「横大路」等の地名が残っていることがわかる。

ここで仮に「北の横大路」を下ッ道や横大路などと並ぶ古代の官道として捉えるならば、こうした官道は「外国语使節の入京が契機となって、国家の威儀を示すためにも官道の整備が必要となり、<sup>⑩</sup>古道がしだいに整えられていったもの」との認識があり、その時期は7世紀を前後するものといわれる。つまり、官道の整備が開始された時期は、高月遺跡の掘立柱建物の時期と重複する。位置的な要素も含め、これは注目に値しよう。

つぎに、高月遺跡の掘立柱建物の柱列が、何らかの基準によって東西・南北を意識している、という事実も、「北の横大路」の存在を前提にすれば、両者に何らかの関連を求めるこことによって、具体的な解釈が可能と思われる。

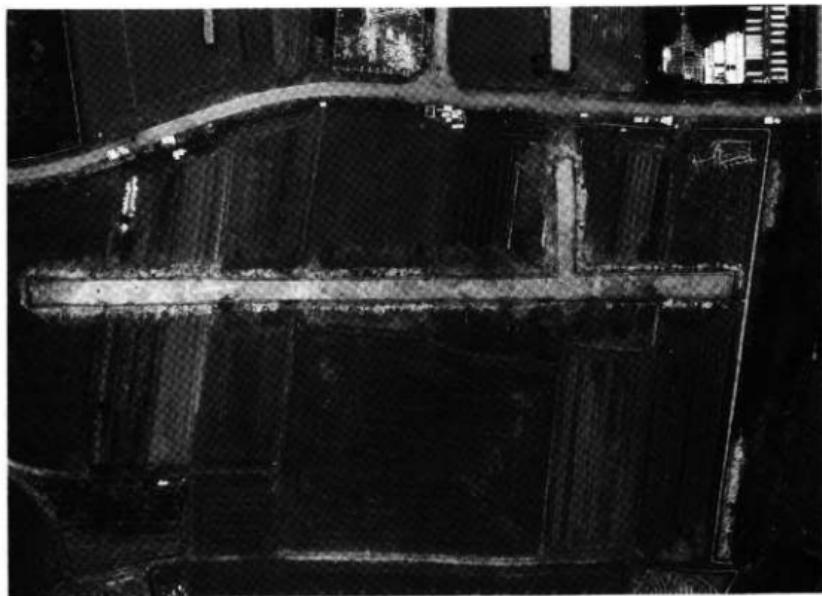
なお、調査地付近では、「北の横大路」が添下郡と平群郡の境界をなしている。このことも、遺跡の性格を考えるうえで重要な element となるのではないか、と考えている。

以上、高月遺跡に関し、そのごく一部が検出された段階において、注目される事項を思いつくままに例挙してみた。もちろん、調査はまだ開始されたばかりであって、今後の調査によって種々の新知見が得られることと思うし、結論は急ぐべきではないだろう。鋭意、緻密な調査を進めると共に、逐次、正確な報告に努めてゆきたい。

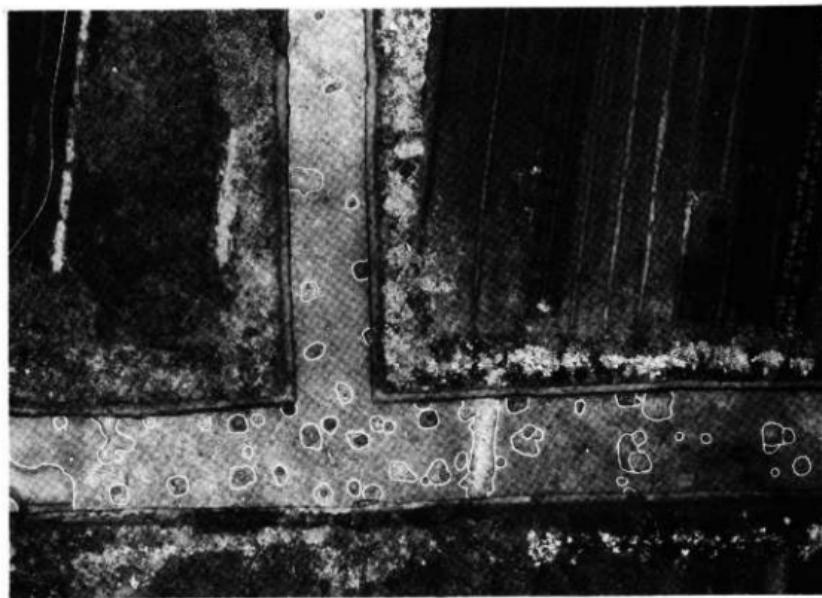
#### <注>

- ①武久義彦「地形分類図」「土地分類基本調査 桜井」および同『奈良、大阪東南部』奈良県企画部開発調整課、1982
- ②奈良県立橿原考古学研究所と大和郡山市教育委員会が1988年に調査。報告書未刊。
- ③林部均「古屋敷遺跡発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報 62年度」奈良県立橿原考古学研究所、1988
- ④藤井利章「萬葉寺遺跡発掘調査概要」「奈良県遺跡調査概報 1982年度」奈良県立橿原考古学研究所、1983
- ⑤酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」「文化財学報 第3集」奈良大学文学部文化財学科、1985
- ⑥服部伊久男「西田中遺跡発掘調査概要報告書」大和郡山市教育委員会、1985
- ⑦服部伊久男「菩提山遺跡発掘調査概要報告書」大和郡山市教育委員会、1988
- ⑧伊藤勇輔「法起寺南遺跡の報告書」「奈良県遺跡調査概報 1982年度」奈良県立橿原考古学研究所、1983
- ⑨山川均「本庄・杉町遺跡発掘調査概要報告書」大和郡山市教育委員会、1989
- ⑩大和郡山市教育委員会が1987年に調査。報告書は未刊。
- ⑪伊達宗泰「小泉孤塚・大塚古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第32冊、奈良県教育委員会、1968
- ⑫「奈良県の主要古墳1」奈良県教育委員会、1971
- ⑬注⑩文献に同じ
- ⑭伊藤勇輔・楠本哲夫「東孤塚古墳」「奈良県文化財調査報告書 第28集」奈良県立橿原考古学研究所、1976
- ⑮小島俊次「割塚古墳の調査」「青陵」No.14、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1968
- ⑯東潮「笛尾古墳発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報 1981年度」奈良県立橿原考古学研究所、1982
- ⑰注⑬文献に同じ

- ⑩寺沢薫ほか「木庄・杉町遺跡試掘調査報告」「奈良県遺跡調査概報 1979年度」奈良県立橿原考古学研究所、1980
- ⑪岸俊夫「大和の古道」「日本古文化論叢」奈良県立橿原考古学研究所、1970
- ⑫城郭関係の記述に関しては一部を藤岡英礼による。
- ⑬大和郡山市教育委員会が1989年に調査。報告書は未刊
- ⑭注⑬と同じ



1. 第6トレンチ全景（上が北）



2. 同上部分（上が北）



1. 堀立柱建物群検出状況（南より）



2. SB-01 検出状況（北より）

平成2年3月31日 発行

大和郡山市文化財調査概要 17

## 高 月 遺 跡

第1次発掘調査概要報告書

編集 大和郡山市教育委員会  
大和郡山市北部山町248-4

発行 大和郡山市都市整備部  
大和小泉駅前区画整理工事事務所  
大和郡山市小林町170-2

印刷 明新印刷株式会社  
奈良市橋本町36